

特殊学級時代蘇える"みんな元気"

原沢 佳子 (昭和 39 ~ 42 年度在職)

広い廊下の一番奥の教室。

クルクル・ガラガラ鳴る車椅子。

バタッパタッと上履きのリズム。

トントン床を打つ松葉杖のまるいひびき。

笑い声と混じって近づいて来るのです。通園バスが着く時刻に毎日聞いた音は、20 余年を過ぎた今も『若草学園』の名と共に蘇えて来ます。

私は 1964 年 4 月に赴任し小学部 3 年生を担当しました。そして、その学年が小学校 6 年を修了するまでの 4 年間勤務することができました。でも、4 年間ずっと一緒だった児童は少なく、転入・転出による賑やかな出席簿を持ち歩いていました。

放課後病室へ行き、学習指導を済ませて教室へもどると、自習や読書・手紙書きなどをしている子が居るのです。家族や友達から離れて治療を受けながらの日々を家族に伝え、父母との通信を学級通信として試みました。週末には、何が書かれるのか、誰のお話が載るのか、・・・と鉄筆の動きに注目する瞳が机を取り囲むことがありました。

水でっぽう遊びでは誰の水が遠くへ飛んだかしら? 訓練室のビーズ通しも大へんだっただ、不自由な手で字を書かされたのは、さぞ悲しかったでしょうね。八幡山へ遠足を楽しんだ日。一週間も報道関係者が教室に出入りし、柳家つばめさんと仲良しになった事もありました。

5 年生の時は、カーテンで仕切りをした教室でした。6 年生の朗読や先生の声が時どき聞こえましたが、あの頃は 5 年生が多くて、さぞ迷惑な騒がしさだったでしょう。カーテンが取り払われ、複式学級になった事がありました。私も児童もほとんどが初めての経験でしたから、印象に残る事も少なくありません。5 年生が 6 年生の問題を解いてしまって、「先生・・・こうですよね。」と小声で言う時の表情が、何と輝いて可愛らしかったこと!

遠出の経験が少ないことから、修学旅行は思い切って京浜へと計画し、目的地を NHK 放送センターと横浜港に決めました。横浜港では氷川丸の見学と船内レストランでの昼食を予定し、付添いに父兄も参加する事になった矢先、中止命令? が出ました。理由は都心の交通事情から考えて好ましい見学地と言えないという事でした。これは一大事です。

「どうしても、認めていただけませんか。」

「……………」

「児童の体力や途中の安全は十分に注意します。本当に楽しみにしているので、ダメなんて私からは言えません。」

「……………まあ、再考してみましよう。」

そして、やっと連絡が届いた時は、「万歳!」で大さわぎでした。

「私が責任を持ちます。安全第一でね。」とおっしゃって下さった校長先生を忘れる事が出来ません。若草学園で学ぶ一人ひとりに細谷小学校の児童として親しく接して下さいました。卒業式には個々に声をかけて下さって、感激の記念撮影となりました。

病と戦いながら明るく強く生きる子ども達に囲まれ、諸先生方や病院の職員の皆さんから数え切れないものを学ばせていただいた 4 年間でした。限り無く蘇える日々は、とても書き尽せず、ただその月日を経験させていただいた事に感謝して止みません。



氷川丸の前で